《資料紹介》

日本図書館協会に賜与された銀杯をめぐって

―シベリア出兵と恤兵図書雑誌の寄附募集―

佐藤裕亮

1．銀杯発見の経緯とその由来

2019年10月初旬，日本図書館協会事務局に東京大学附属図書館から次のような問い合わせがあった。耐震改修工事の作業に関連して，図書館に関連するさまざまな文物等を保存している部屋を整理していたところ，銀杯と由来を記した文書がみつかったが，事情がわかるようであれば教えてほしい，と。

銀杯は，緩衝材と思（おぼ）しき布や綿，蕎麦殻に包まれるようにして箱に収められていた[1]。銀製品特有の黒ずみは認められるものの，状態は概ね良好で（図1），その由来についても，箱内に同梱されていた文書（賞杯辞令）にみえる，次のような記述によってうかがうことができる（図2）。

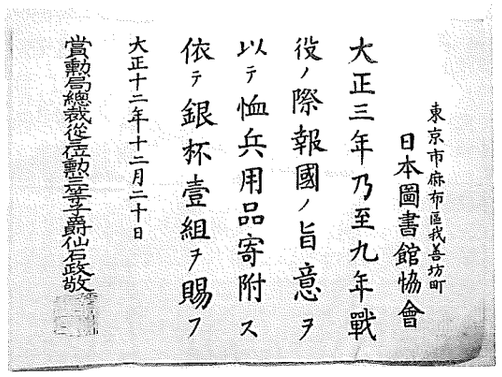
大正三年乃至九年戦役ノ際報国ノ旨意ヲ以テ恤兵用品寄附ス依テ銀杯壱組ヲ賜フ

賞勲局は勲章・褒章など栄典を所掌する官庁で，戦役・事変の際には，従軍者に授与される「従軍記章」のほかに，軍資金軍用品献納者恤兵（じゅっぺい）金品または従軍者家族遺族賑恤金品を寄附したる者等への賞杯の賜与（しよ）に係る事務なども執り行っていた[2]。

1915（大正4）年12月24日，賞勲局は，日清戦争・北清事変・日露戦争の際の施行例に倣い「大正三四年戦役」つまり第一次世界大戦についても同様に賞杯賜与を行うため，賞杯外面，賞杯辞令書式，褒状書式等を定めて上申し，同月27日に裁可されている[3]。この段階では「大正三四年戦役」を対象としていたが，のちには「大正三年乃至九年戦役」という文言に改められ，シベリア出兵も含める形で賜与が行われるようになる。

シベリア出兵に関連して日本図書館協会に銀杯が賜与された事実は，早い時期に編纂された協会史や年表からも確認することができる。1941（昭和16）年の創立50年記念事業の一つとして編纂・執筆が進められた『日本図書館協会五十年史』や『日本図書館協会五十年史事績年表』，1951（昭和26）年に刊行された『日本図書館協会六十年略譜』には，1924（大正13）年3月11日の出来事として「恤兵寄附に対して銀盃一組が下賜」された件が記されている。だが，以降に編纂された協会史・年表からはその姿が消えていく[4]。

▲図1　銀杯一組（三つ重ね）



東京市麻布區我善坊町
日本圖書館協會
大正三年乃至九年戰
役ノ際報國ノ旨意ヲ
以テ恤兵用品寄附ス
依テ銀杯壹組ヲ賜フ
大正十二年十二月二十日
賞勲局總裁從三位勲二等子爵仙石貞敬

▲図2　日本図書館協会宛 文書（賞杯辞令）

それにしても，銀杯賜与の直接の理由となった，日本図書館協会による「恤兵寄附」とはどのようなものであったのだろうか。まずは『図書館雑誌』の記述を参照しながら，その経緯を概観してみたい。

2．恤兵調査委員会の設置

1914（大正3）年7月，第一次世界大戦が勃発すると，日本も日英同盟を理由に参戦する。1918（大正7）年11月ドイツが休戦協定に調印し，第一次世界大戦は一応の終結をみるが，その間にロシアでは革命により帝政が打倒され，1918年3月3日にはソヴィエト政権がブレスト＝リトフスク条約を結んで同盟国側と講和，連合国を離脱している。危機感を覚えたイギリス・フランス両国は日本にシベリアへの出兵を要請し，アメリカもまた日本に対し，在露チェコスロバキア軍救援を大義名分とした共同派兵を提議，1918年8月2日，ついに日本はシベリア出兵を宣言し，他の連合国軍とともにウラジオストク方面へと兵を進めた。

1918年10月10日，日本図書館協会事務所は，総裁・徳川頼倫の好意により南葵文庫の隣に新築された洋館へと移転する。住所は東京市麻布区我善坊町32，事務主任の石川潔らが同事務所で，和田万吉会長らは東京帝国大学図書館でそれぞれ会務に従事し，編輯部は従来通り東京市立日比谷図書館内に置かれることとなった[5]。

1918年10月30日午後5時，我善坊町の事務所に和田会長以下数名の協会関係者の姿があった。「恤兵調査委員会」を開催し，その実行方案について審議するためである。出席者は和田会長のほか，坪谷善四郎委員長，伊東祐穀・植松安・橘井清五郎・杉野文弥の各委員および石川潔幹事の計7名。同幹事による陸軍省出頭顛末報告ののち検討が進められ，寄付募集の案を作成のうえ『図書館雑誌』誌上に添付し，評議員会に報告することとなり，夜9時になってようやく閉会したという[6]。

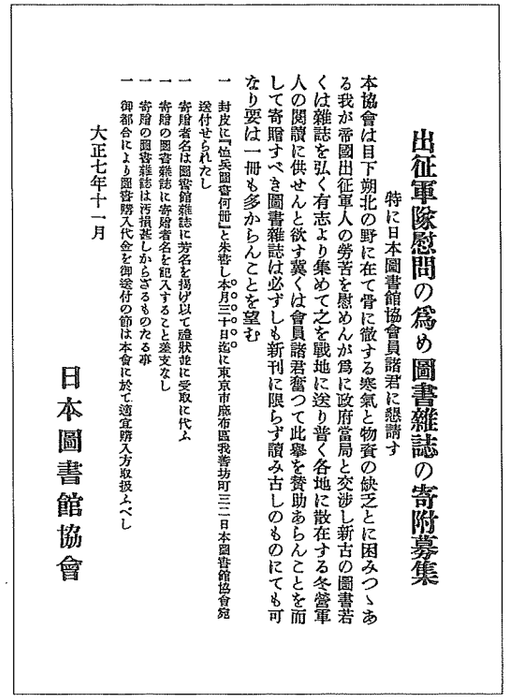
3．恤兵図書募集の経過

『図書館雑誌』掲載の件は直ちに実行に移された。1918年10月31日発行『図書館雑誌』36号には「出征軍隊慰問の為め図書雑誌の寄附募集」と題する趣意書が掲載され（図3），寄贈の図書雑誌は11月30日までに我善坊町の協会事務所に送付すること，図書雑誌は著しい汚損がなければ必ずしも新刊でなくてもよく，図書購入代金を寄付する場合は，協会で適宜購入することなどの留意事項が挙げられている[7]。

1918年11月7日の評議員会でも恤兵図書募集について委員会報告後に協議され，東京市内の各図書館や大学・専門学校等に趣意書の掲示を依頼することになった[8]。

1919（大正8）年2月28日発行『図書館雑誌』37号「恤兵彙報」には寄贈者名が掲げられるとともに，個人・団体から寄贈された図書雑誌9,134冊，寄付金242円に及んだこと，寄贈の図書雑誌には「日本図書館協会募集慰問図書」の印を押捺の上，発送に着手しつつあることが報告されている[9]。

1919年9月3日発行『図書館雑誌』39号「恤兵彙報」は，前号掲載以降寄贈分の寄贈者名を掲げ，協会本部受付分が累計9,230冊に及んだことを伝えるとともに，協会九州支部の募集状況について記



出征軍隊慰問の爲め圖書雜誌の寄附募集

特に日本圖書館協會員諸君に懇請す

本協會は目下朔北の野に在て骨に徹する寒氣と物資の缺乏とに困みつゝある我が帝國出征軍人の勞苦を慰めんが爲に政府當局と交渉し新古の圖書若くは雜誌を弘く有志より集めて之を戰地に送り普く各地に散在する冬營軍人の閲讀に供せんと欲す冀くは會員諸君奮つて此擧を賛助あらんことを而して寄贈すべき圖書雜誌は必ずしも新刊に限らず讀み古しのものにても可なり要は一冊も多からんことを望む

一　封皮に「恤兵圖書何冊」と朱書し十月三十日迄に東京市麻布區我善坊町三二日本圖書館協會宛送付せられたし

一　寄贈者名は圖書館雜誌に芳名を掲げ以て謝狀並に受取に代ム

一　寄贈の圖書雜誌に寄贈者名を記入すること差支なし

一　寄贈の圖書雜誌は汚損甚しからざるものたる事

一　御都合により圖書購入代金を御送付の節は本會に於て適宜購入方取扱ふべし

大正七年十一月

日本圖書館協會

▲図3　「出征軍隊慰問の為め図書雑誌の寄付募集」

し，図書雑誌3,626冊，資金34円95銭が寄せられ，1918年12月28日に3,568冊を第12師団（小倉）へ納付したこと，1919年１月15日付で留守第12師団長より，協会九州支部長であった佐賀図書館長宛に感謝状が送られたことなどが報告されている[10]。

協会本部取扱分の恤兵図書・資金取扱に関する最終的な報告は1919年12月28日発行『図書館雑誌』40号に掲載され，協会本部取扱分のうち破損資料等を除いた9,534冊（うち寄贈図書1,017冊，寄贈雑誌8,211冊，購入図書306冊）が，陸軍省指定の広島陸軍被服支廠宇品出張所宛に分送された[11]。一方，協会支部による募集はその後も続けられており，1920（大正９）年７月13日発行『図書館雑誌』42号によれば，新潟県支部が図書雑誌21,533冊を第13師団（高田）に献納し，師団長より1920年２月28日付の礼状が送られたという[12]。寄贈を受けた第12師団は1918年に，第13師団は1920年から1921（大正10）年にかけて，それぞれ動員されている[13]。九州支部・新潟県支部による恤兵図書雑誌の募集は，出征する郷土部隊への地域による支援という性格をあわせ持っていたのだろう。

４．銀杯の賜与とその後

1920年，アメリカはシベリアからの撤兵を宣言したが，日本はその後も居留民保護・脅威抑止などを目的に駐留を続けた。1922（大正11）年10月には一連の軍事行動は一応の終息をみるが，1923（大正12）年９月１日には関東大震災が発生し多数の図書館が被災，図書館界はその対応に追われることになる。

銀杯が日本図書館協会へ賜与・伝達されたのは，震災後のことであった。1924（大正13）年５月25日発行『図書館雑誌』57号の記事に，

> 本会に於ては曩に大正七八年中，各会員の協力を乞ひ，西比利亜出征帝国軍人慰問のため，一万有余冊の図書及雑誌を恤兵寄附したが。今回その功により三月十一日，東京府を経て銀盃一組を下賜せうれた[14]。

とあることから，東京府を経て同年３月11日に協会へもたらされ，15日に開催された評議員会で披露されたことがわかる[15]。

銀杯はその後，東京大学附属図書館へと移されたが，その経緯については記録が残されておらず，よくわかっていない。

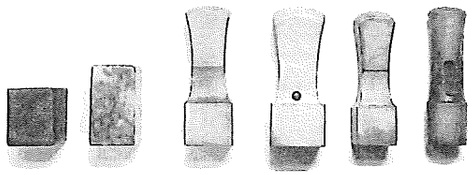
５．同梱されていた協会印

なお，2019年10月25日に実見した際，銀杯を収めた箱内からは，銀杯や文書のほかに協会関係の印顆（いんか）５点も新たに見つかっている（図４・図５）。

印顆はそれぞれ茶封筒の切れ端に包まれ，箱内の四隅に収められていたが，その封筒切れをつなぎ合わせてみると，次のような印字が確認できた。

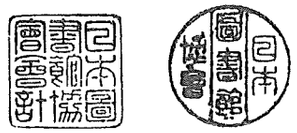
> 東京市麹町区霞ヶ関三丁目四番地（文部省内）
> 社団法人日本図書館協会
> 振替口座東京二四一八一
> 電話　文部省内三八一

日本図書館協会の事務所が我善坊町から文部省内に移転したのは1933（昭和８）年８月のことである[16]。会長印・理事長印が混在していることや，理事長印が２点みつかっていることなどから，印そのものが実際に使用されていた時期や用途，使用人物はそれぞれ異なると思われるが，それらが一括され，銀杯とともに調査時点のような形で梱包されたのは，協会事務所の文部省内移転以降のことと推察される。



▲図４　印顆

日本図書館協会会長印（2.0×2.0cm）　日本図書館協会理事長之印（2.1×2.1cm）　日本図書館協会理事長印（2.4×2.4cm）



日本図書館協会会計（1.8×1.8cm）　日本図書館協会（径1.8cm）

▲図５　印影

このあたりの問題については，日本図書館協会の組織変更や役職の存廃，和田万吉，植松安，姉崎正治，高柳賢三をはじめとする東京帝国大学関係者の協会への関わり，発見された印顆の使用状況なども含めて，今後，慎重に考察を進めていく必要があるだろう。

謝辞　銀杯の調査についてご高配を賜りました，東京大学附属図書館総務課大澤類里佐氏，中村美里氏に記して感謝の意を表します。

注

1）2019年10月25日（金）の調査時に確認された，箱１点（18.2×18.2×12.9cm）の内容物は次の通り。
- 文書：１通（大正12年12月20日，賞勲局総裁仙石政敬／日本図書館協会宛，文書右上に桐紋の透かしあり）
- 銀杯（上）：１点（径12cm，165g，中心桐紋内面輪郭雷紋，外面金粉文字「国報謝致」）
- 銀杯（中）：１点（径13.5cm，235g，同上）
- 銀杯（下）：１点（径15cm，288g，同上）
- 石製角印「日本図書館協会会長印」１点（2.0×2.0cm），カバー付き。
- 木製角印「日本図書館協会理事長之印」１点（2.1×2.1cm）
- 木製角印「日本図書館協会理事長印」１点（2.4×2.4cm）
- 木製角印「日本図書館協会会計」１点（1.8×1.8cm）
- 木製丸印「日本図書館協会」１点（径1.8cm）
- その他：布・綿・蕎麦殻など

2）総理府賞勲局編『賞勲局百年資料集』上，大蔵省印刷局，1978，p.630-707.

3）「大正三四年戦役に関し軍資金軍用品献納者恤兵金品又は従軍者家族遺族賑恤金品を寄附したる者等へ下賜せらるべき賞杯辞令書式」『賞勲局百年資料集』（注２前掲書），p.695-697. なお，当該資料で掲げられている「賞杯外面」と，日本図書館協会に贈られた銀杯の外面は一致する。

4）以下の日本図書館協会史・年表からは，銀杯賜与に関する直接的な言及を確認することはできなかった。
- 日本図書館協会編『日本図書館協会70年史』日本図書館協会，1961，55p.
- 日本図書館協会八十年記念委員会編『日本図書館協会80年史年表：1892-1971』日本図書館協会，1971，72p.
- 日本図書館協会編『近代日本図書館の歩み：日本図書館協会創立百年記念』本篇，日本図書館協会，1993，818p.

5）「本会紀事：事務所移転につき稟告」『図書館雑誌』36，1918.10，p.93.

6）「本会紀事：恤兵調査委員会」『図書館雑誌』37，1919.2，p.36. なお委員らの氏名については，『近代日本図書館の歩み』本篇（注４前掲書）に掲載されている「役員名簿」や，日本図書館文化史研究会編『図書館人物事典』日外アソシエーツ，2017，岡村敬二『戦前期外地活動図書館職員人名辞書』武久出版，2017などを参照しつつ補記した。

7）「出征軍隊慰問の為め図書雑誌の寄附募集：特に日本図書館協会員諸君に懇請す」『図書館雑誌』36，1918.10

8）「本会紀事：評議員会」『図書館雑誌』37，1919.2，p.40.

9）「本会紀事：恤兵彙報」『図書館雑誌』37，1919.2，p.40-42.

10）「本会紀事：恤兵彙報」『図書館雑誌』39，1919.9，p.71-74.

11）「本会紀事：西比利亜出征軍慰問恤兵図書並に資金取扱報告」『図書館雑誌』40，1919.12，p.46.

12）「本会紀事：出征軍人慰問図書雑誌報告書」『図書館雑誌』42，1920.7，p.46-64. なお，新潟図書館編『新潟県立新潟図書館50年史』新潟図書館，1965，p.22に，大正13（1924）年10月９日付で協会新潟支部に贈られた「褒状」の写真が掲載されている。

13）陸軍参謀本部編『西伯利出兵史：大正七年乃至十一年』下，復刻版，新時代社，1972所収の第１巻附表第１（其１～其６）「派遣部隊ノ編制，動員（編成）下令及完結月日及復員完結月日一覧表」を参照。

14）「本会記事：銀盃一組賜せらる」『図書館雑誌』57，1924.5

15）「本会記事：評議員会及祝賀送別会」『図書館雑誌』57，1924.5もあわせて参照。

16）事務所移転先の住所については「急告　事務所移転」『図書館雑誌』165，1933.8の記述により「東京市麹町区三年町一番地文部省内」であることが確認できる。なお，事務所の移転問題については，『近代日本図書館の歩み』本篇（注４前掲書）p.55にも記述がある。

参考文献

- 池田十吾『第一次世界大戦期の日米関係史』成文堂，2002，339p.
- 押田信子『抹殺された日本軍恤兵部の正体：この組織は何をし，なぜ忘れ去られたのか？』扶桑社，2019，329p.
- 功刀俊洋「1920年代の軍部の思想動員：新潟県上越地方の事例」『一橋論叢』91(3)，1984.3，p.327-344.
- 菅原佐賀衛『西伯利出兵史要』信山社出版，1989，196p.（信山社復刻叢書）
- 東條文規『図書館の近代：私論・図書館はこうして大きくなった』ポット出版，1999，303p.
- 日本図書館協会『日本図書館協会五十年史事績年表』日本図書館協会，1986，55p.（日本図書館協会百年史・資料２）
- 日本図書館協会六十周年記念出版委員会編『日本図書館協会六十年略譜』日本図書館協会，1951，62p.
- 樋口龍太郎『日本図書館協会五十年史』日本図書館協会，1989，156p.（日本図書館協会百年史・資料４）
- 村上美代治「第一次世界大戦と図書館活動：戦時下のALA活動」『大学図書館問題研究会大図研論文集』13，1986.4，p.39-50.
- 村上美代治「戦時体制を支えた図書館活動：戦意を高揚させた慰問図書の募集」『図書館雑誌』86(8)，1992.8，p.513-516.
- 村上美代治「第５章　協力事業にみる図書館活動」『満鉄図書館史』，2010，p.122-146.

（さとう　ゆうすけ：日本図書館協会事務局）

［NDC10：010.21
BSH：1. 図書館－日本－歴史　2. 日本図書館協会］